

かたりべ 77

豊島区立郷土資料館だより



魚沼市永林寺本堂の欄間彫刻（木原尚氏撮影）



三条市本成寺にある石川雲蝶の墓（木原尚氏撮影）

越後の名匠石川雲蝶の世界

郷土資料館では、三月一九日（土）から三十一日（木）までの会期で、新潟県中越地震復興支援「特別公開 越後の名匠石川雲蝶の世界」と題する展示会を開催いたします。

石川雲蝶は、文化十一年（一八一四）に江戸の雑司ヶ谷で生まれたとされる匠（彫刻師・絵師）です。本名は石川安兵衛。弘化二年（一八四五）に越後国に入ったと伝えられており、それ以後、同国各地の寺院や神社を中心に多くの彫刻・絵画作品を残し、明治一六年（一八八三）に七〇歳で死去しました。現在、新潟県三条市本成寺の墓地に眠っています。

今回の特別公開では、雲蝶が遺した作品のうち、新潟県魚沼市堀之内に所在する永林寺が所蔵している欄間彫刻や、欄間絵・燈籠台・香炉台等十数点を展示いたします。なかでも観る角度によって微妙に表情が変化する深彫りの欄間彫刻「天女」や「竜」は圧巻です。本来、これらは、永林寺に向かないと見学できない貴重な作品群です。越後の名匠石川雲蝶による繊細な鑿（の）きざきや、生き生きとした筆づかいを、ぜひこの機会にご覧ください。

なお、今回の特別公開は、新潟県北魚沼郡堀之内町（現魚沼市堀之内）と豊島区との間で、二〇〇三年に災害協定を締結したことが発端となっています。昨年一〇月二三日に発生した新潟県中越地震では、堀之内町も大きな被害を受け、今回雲蝶の作品をお借りする永林寺様も被災されています。以降、豊島区では被災地に対してさまざまな支援を行ってまいりましたが、本事業もまた、一連の支援事業の一環をなすものであります。あらためて、被災された皆さまに対しましてお見舞いを申し上げます。

■新潟県中越地震復興支援「特別公開 越後の名匠石川雲蝶の世界」
会期…3月19日（土）～31日（木）ただし、21日・28日は休館

資料を生かす「一期一会」としないために 企画展「あつたかく暮らす」より

◆企画展は三月一三日までです！

郷土資料館では、現在、企画展「あつたかく暮らす」を開催中です。展示室には、ひと昔前の暖房具、火鉢・あんか・かいり・湯たんぽ・足温器などが所狭しと展示されています。

ここでは、企画展見学者のさまざまな反応を紹介したり、展示終了後の新たなステップへの可能性について考えてみたいと思います。

◆さらにと5分、じっくり3時間

ひとりひとりが見学に要した時間を正確に調査したデータはありませんが、そ



企画展資料列品風景

れぞれの関心度によって見学の所要時間に長短があります。来館者の中には、室内をぐるっと見ただけ、ほとんど素通りという方がいらっしやいます。その一方で、ガラスケースの中の一点の資料をじっくりのぞき込んで観察し、資料の説明文を一字一句もろさず丹念に読み、相当な時間をかけて見学される方もいます。一度見た資料でも、何か気になることがあったのでしょうか、引き返して見直す方もいます。自分の時間配分でひとりで見学する人、メモを取りながら見る人、同行の人と資料を紹介した話をしながら見る人等、実に多様です。

◆もう一度見たいあの資料

大げさな言い方ですが、展示会は、その資料に出会える一度限りの機会、つまり「一期一会」という性格を持っています。ところが、後日、あの資料をもう一度見たいと思うことがあります。そのような時、希望が叶えられたらとても嬉しいことでしょう。展示会の内容の多くは『展示図録』に掲載してありますが、それがすべてではありません。また、いわ

ゆる郷土に関する専門的な図書を閲覧する目的で来館する方は多くいますし、ガラスケース内に展示されていた実物の資料を見たい、と来館する方も時々いらっしゃいます。今後、実物資料もすぐに見ることができるような環境を整えていきたいと思っています。

◆企画展資料をどう活かすか

ところで、今回展示した暖房具は、日本各地の気候・風土・生業が異なる地域



形態・材質・色彩・製作年が異なる火鉢さまざま



ころころこたつ・ねこあんか・足温器… 使い方を知っていますか？

のもの、さらに東アジアをはじめ世界各地の暖房具と比較研究する素材になるものと考えられます。資料は、単に寄贈者自身の思い出のものとして当館に保管しているわけではありません。形あるモノを資料とし、そこから人の暮らしの環境や変遷を調査・研究することで、未来を見つめることができる学術資料としても貴重なものと考えられます。今回展示した一三〇点の実物資料をそのようなものとして、より活かしていきたいと考えています。

(福岡)

*企画展図録『あつたかく暮らす』を二〇〇円で販売しています。ご来館の折にお買い求めください。

郷土資料館 二〇〇五年度の戦争展示について

今年は、東京が空襲を受け、そして、アジア・太平洋戦争が終結してから六〇年目にあたります。郷土資料館では、江戸東京博物館、すみだ郷土文化資料館と協同で東京空襲の調査・研究を進め、展示へ結びつけようと準備を進めてきました。そして、「東京空襲六〇年」を共通テーマとして、江戸東京博物館では「東京空襲六〇年―被災者の軌跡―」展（四月九日まで）を、すみだ郷土文化資料館では「東京空襲六〇年―三月一〇日の記憶―」（四月一〇日まで）を開催しています。

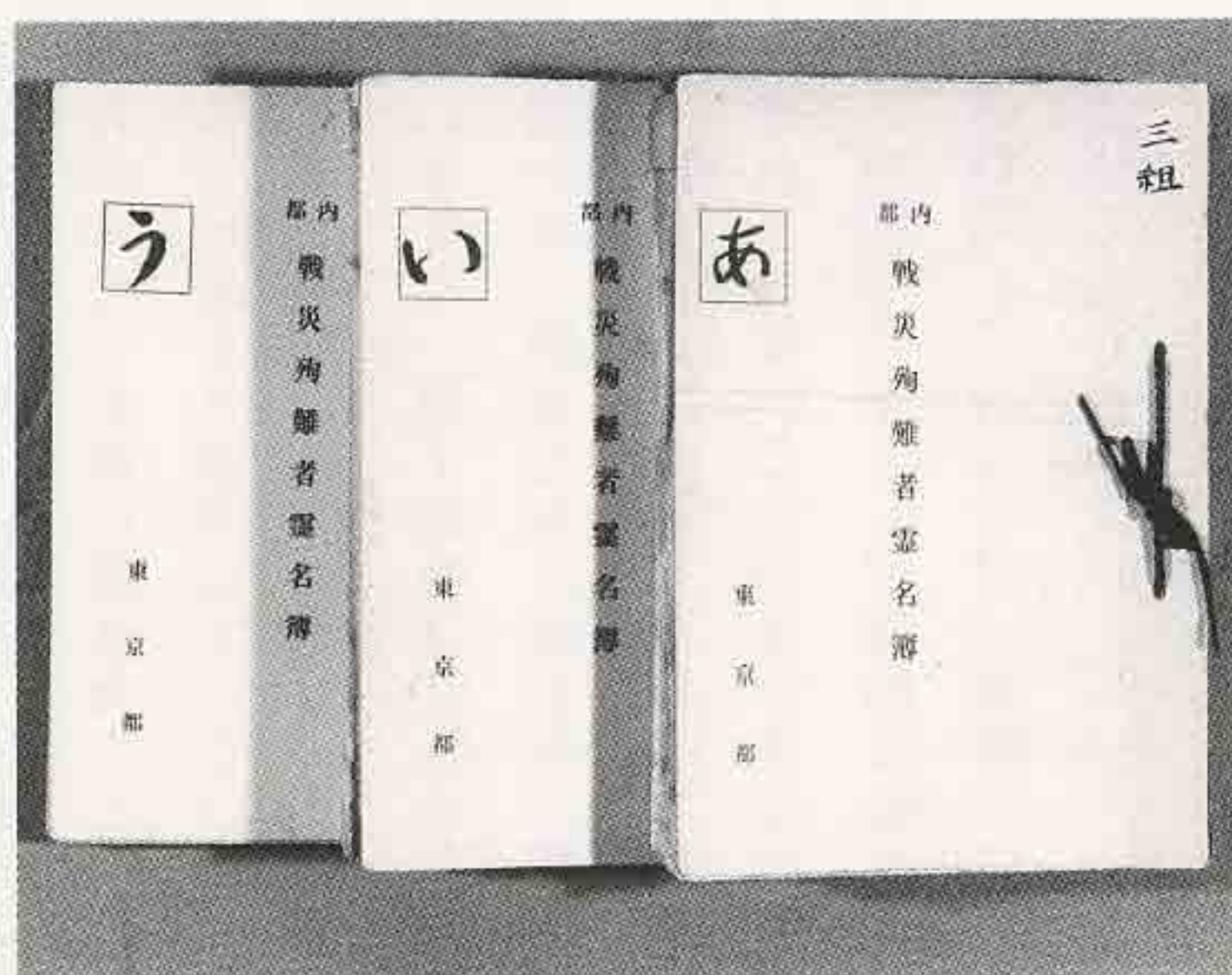
郷土資料館でも、両館のあとを受けて「東京空襲六〇年」の展示を企画いたしました。その第一弾は、四月九日から収蔵展示室の二箇所のコナーを使用して、第二弾は、七月二七日から企画展として開催いたします。

四月九日からの展示では、四月一三日の空襲の被災品と「空襲体験画」を展示いたします。「空襲体験画」とは、空襲を体験なさった方々が自らの手で、その記憶を絵にしたもので、昨年の八月から

九月にかけて、広報紙その他のメディアにより各方面に呼びかけ、その呼びかけに応じてご提供いただいたものです。これらの絵画の描線の一本一本、彩色の筆一筆には、癒しがたい記憶、悲しみ、怒り、平和を願う気持ちが込められています。これらの絵画の展示が、空襲の悲惨さをあらためて認識する場となればと考えております。

この「空襲体験画」は、七月二七日からの企画展「東京空襲六〇年―空襲の記憶と記録―」でも引き続き展示する予定です。しかし、四月一三日・五月二五日などの「山の手空襲」と呼ばれる空襲の体験画は、三月一〇日のものに比べて、大変少なく、また集まりにくい状況といえます。そこで、当館では、再度「空襲体験画」の募集を行いたいと思っております。応募要領を事務局・展示室にご用意致しますので、多くの方々のご応募をお待ちしております。

いまだ紹介したように、七月下旬からの企画展は、「空襲の記憶と記録」というサブタイトルになっています。「空襲



「都内戦災殉難者霊名簿」

の記憶」とは、前述した「空襲体験画」を象徴する言葉です。一方の「空襲の記録」というのは、今回の企画展のもう一つの重要な展示テーマなのです。

二〇〇一年一月に、「都内戦災殉難者霊名簿」という資料が発見されました。

これは、空襲で亡くなった方々の氏名・年齢・性別・住所・遭難地・仮埋葬地・遺族の住所などが記された、約三万人分の名簿です（成立の経緯などについては、二〇〇二年度第三回収蔵資料展図録「豊島の空襲―戦時下の区民生活―」に詳述されています）。当館と江戸東京博物館・すみだ郷土文化資料館の三館では、発見当初から共同して、調査・研究・分析を重ねてきました。その成果として、現在、

江戸東京博物館の展示では、三月一〇日の空襲被害の実相をこの名簿のデータから明らかにしようと試み、「空襲被災地図」を作成し、展示しています。

七月下旬からの郷土資料館の企画展でも、この「都内戦災殉難者霊名簿」に基づいたデータから、四月一三日の空襲について新たな知見を紹介できるような作業を進めており、目下奮闘中です。これが二つ目のテーマで、「空襲の記録」ということを意味しています。もちろん、これらの資料の他に、四月一三日の空襲に関連した様々な資料を展示する予定です。会期中多くの方々のご来館をお待ちしております。

ここで紹介した一連の空襲関連の展示を通して、アジア・太平洋戦争が終結してから六〇年目という節目の年に、戦争と平和について、来館者の皆さんと一緒にしっかりと考えていきたいと思っております。

（いとう）

「空襲体験画」の応募は、応募要項に沿った方法でお願いしております。詳しいことは、お気軽に担当学芸員までお尋ねください。多くの方々のご応募をお待ちしております。

豊島をさぐるその10

鬼子母神を描いた絵画

鬼子母神は、雑司ヶ谷鬼子母神堂によって豊島区ではその名がよく知られています。安産・子育ての神として有名な鬼子母神ですが、今回はそのいわれを簡単に振り返り、さらにその姿を描いた絵画作品を取り上げたいと思います。

鬼子母神という名前

鬼子母神というのは仏教の女神ですが、仏教の発祥地であるインドの言葉でその名を「ハーリティー」といいます。それが中国に入りさまざまな漢字が当てられて表記されるようになったため、多くの名前の表記があります。そのうち、音訳（原語の発音にあつた漢字を当てた訳）である「訶梨帝母」、そしてその意訳（原語の意味にあつた漢字を当てた訳）である「鬼子母神」が日本でよく知られています。

安産・子育ての神となった由来

『雑宝蔵経』という仏教經典に以下のような話が記されています。鬼子母神は一万の子を産み育てていたにもかかわらず、暴虐な性質で人の子を殺して食べるため、人々から恐れられていました。そこで釈

迦は彼女の最愛の末の子を鉢の底に隠してしまいました。末の子が見つからない鬼子母神は悲嘆し、釈迦は「一万の子のうち一子を失っただけでもこんなに苦悩するのだから、そなたに子を殺害された親の気持ちはどうであろうか」と諭された。そこで鬼子母神は、これからは決して人の子を殺さないことを誓い、仏教に帰依した、という話です。鬼子母神ははじめ鬼女であつたのが、ここから善神となり、安産・子育ての神となったのです。

鬼子母神の絵画

鬼子母神を描いた絵画作品は、機能によって以下の二つの種類に分けることができます。

① 礼拝像

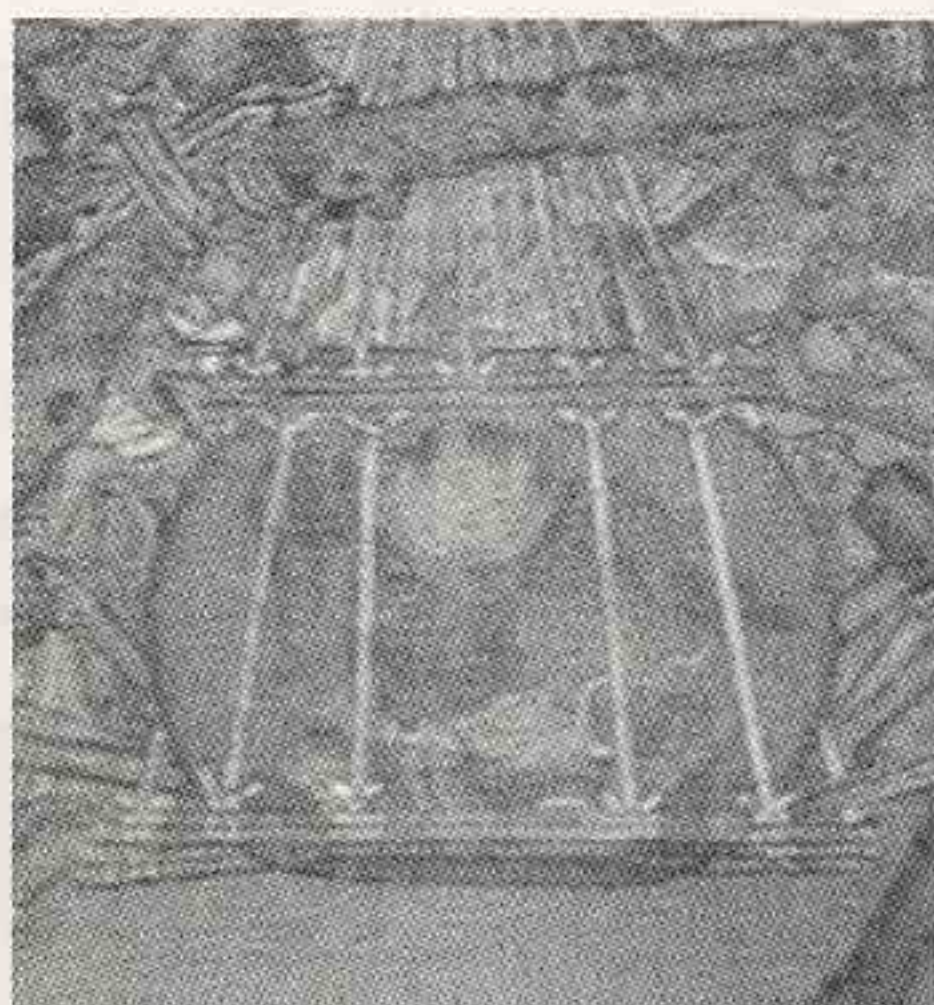
礼拝像とは拝む対象としての絵です。つまり、仏や神の姿を絵に描いて、それを儀式などで壁面に掛けたりして拝んで使われます。日本では後で紹介する説話画よりも、こちらの形式で描かれた絵画の方が知られており、作例も多く残っています。なかでも優美な天女の姿で描かれている醍醐寺蔵「訶梨帝母像」が有名

です。また、十羅刹女という法華經の護持者である一〇名の女性像とともに鬼子母神が描かれていることもあり、これらも多くは天女の姿で描かれています。その一方、角が生え、口の裂けた恐ろしい形相の鬼形の鬼子母神像も残っています。

② 説話画

説話画とは、仏教經典に記されている話を絵画化したものであり、先に紹介した『雑宝蔵経』の話をもとにしたと考えられる作品が描かれました。この絵は一般的に「掲鉢図」というタイトルがつけられており、中国でしか制作されませんでした。釈迦によって鉢の底に隠された鬼子母神の末の子を救おうとして、鬼子母神の手下がその鉢を掲げようとしている様子が描かれています。日本では鬼子母神の末の子が鉢に隠されたというストーリーがあまり普及していないこともあって、この図は一般にはほとんど知られていません。鬼子母神は宮廷の女性の姿で描かれ、侍女たちに囲まれ、悲嘆のあまり座り込んでしまっています。まだ解明されていないことの多い作品ですが、鬼子母神の手下として奇妙な姿をした化物が登場しているなど、興味の尽きない作品でもあります。

（藤岡）



鬼子母掲鉢図巻 李森筆 清時代 個人蔵 右から、悲嘆にくれる鬼子母神、鉢に入れられた鬼子母神の末の子、鬼子母神の手下（京都国立博物館『ヒューマン・イメージわれわれは人間をどのように表現してきたか？』より転載）

セピア色の記憶

第12回

長崎地域とダットサンとの「へエッ」な関係

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した昭和六年（一九三一）と現在（二〇〇五年二月一五日）の南長崎三二一〇付近（椎名町バス通り沿い）の様子です。地図に示した*印は撮影地点を、↓印は撮影方向を示しています。

明治四四年（一九一一）に渋谷町広尾で橋本増治郎が創業した（株）快進社^{かいしんしゃ}は、大正三年（一九一四）に現在の東長崎駅の北西側に移転しました。（株）快進社とは、



人や荷物の移動・運搬手段が、日本ではまだ牛馬車や荷車中心だった頃に、自動車の国産化に挑戦した町工場であり、のちに戸畑^{とばた}鋳物^{いぶつ}（株）（現日産自動車^{にっさん自動車}）と合併した会社です。大正一四年には、上写真の看板に記されている「合資会社ダット自動車商会」へと改称され、その数年後には、営業所近くに工場も移転します。創業者の橋本は、走行試験と工場員の通勤手段とを兼ねて、自動車を目白駅と

東長崎駅との間で走らせていましたが、地元住民の要望に應えるため、大正一二年に許可を得て、乗合自動車（乗合バス）の営業を始めたとされています。のちに目白駅と豊島園間へと延長し、日曜日のみ営業しましたが、収益はほとんどなかったということでした。営業所の前で撮影されたこの写真には、乗合自動車とともに運転手らしき男性数名と、バスガール（車掌）三名が確認できます。

なお、（株）快進社で試作した国産車第一号は、橋本に資金援助した田健治郎・青山^{あき}緑郎・竹内明太郎の頭文字からDAT（脱兎）号と名付けられ、先の乗合自動



かつて東長崎駅そばにあった（株）快進社の工場跡には、現在スーパーマーケットと集合住宅が建っている

車の車両には、ダット41型や51型が使用されました。後年、小型自動車ダット91型が本格的生産に入ると、ダットの息子の意味で「ダットソン」号と名付けられました。が、「ダットソン」は「損」に通じることから、「太陽」を意味するDATSUN（ダットサン）に変更しました。日本の自動車産業の黎明期^{れいめい}に、豊島区長崎の地がその表舞台に堂々と位置づいていたことは、あまり知られていない歴史的事実です。（秋山）

*本欄は、資料館編『町工場の履歴書』（一九九四年度特別展図録）（一九九四年刊）の記述を参照しました。

郷土資料館からのお知らせ

★調査報告書第17集『戦地からの手紙Ⅰ』
発刊のお知らせ

日中戦争からアジア・太平洋戦争にかけての時期、豊島区から中国大陸・ビルマ（ミャンマー）に出征して戦死した一兵士が、家族に宛てた書簡三三五通を収録した資料集です。これらの書簡を書いたのは鏑木正義さん。ビルマから発送された自筆の絵手紙は、今までに何回か展示を通して紹介してきましたが、この資料集では、当館に収蔵されている鏑木さんの書簡すべてを収録しています。

◆販売価格 一二〇〇円（B五判 二段組 二〇〇頁）

*四月一日より販売を開始いたします。

★郷土資料館臨時休館・臨時開館のお知らせ

企画展「あつたかく暮らす」が三月一日（日）で終了し、一九日（土）より特別公開「越後の名匠石川雲蝶の世界」（以下「特別公開」と略す）が始まるため、一四日（月）から一八日（金）まで当館は臨時休館となります。また、「特別公開」は三一日（木）で終了となりますので、翌四月一日（金）から八日（金）までは臨時休館となります。ただし、休館中も書籍の販売やレファレンス業務は行なっておりますので、ご利用下さい。

なお、「特別公開」開催中の三月二〇日（日）は、臨時開館いたします。

区民のための 博物館用語の基礎知識

8 動線（どうせん）

展示室内を来館者がどのように見学していくか想定した順路のこと。展示企画者は、展示の趣旨やストーリーに基づいて動線を考えていくが、来館者が必ずしもその通りに見学するとは限らない。一般には、展示室の広さや形状、展示ケースの配置方法、説明文が縦書きか横書きかなどにより、動線は決まってくる。

▽用例△

学芸員A「今回の展示会の動線、途中で行き止まりになってない？」
学芸員B「これぞほんとのドウセン。ボ、だよーん。」
学芸員A「……ハイ、ハイ。」

編集後記

ようやく春の訪れを感じるようになった今日この頃です。今や、日本人の一人が、都民の五人に一人が、春の訪れを目や鼻の不快感で感じているとのこと。花粉症発症の方々にとっては、受難の季節の到来です。お見舞い申し上げます。

四月に実施される区役所の組織改変により、郷土資料館は区民部学習スポーツ課の所属になります。教育委員会から区民部へと所属は変わりますが、豊島区の歴史や暮らしに関する資料を収集・保存し、調査・研究を進め、展示や刊行物など通してそれらを皆さんに還元していく姿勢に変わりはありません。これからもよろしくお願いいたします。（あき）

かたりべ
No.77

2005年3月1日
豊島区立郷土資料館
豊島区西池袋2-37-4

電話 03-3980-2351
http://www.museum.toshima.tokyo.jp

